

Title	奥井都市論の形成と構成
Sub Title	
Author	藤田, 弘夫(Fujita, Hiroo)
Publisher	三田社会学会
Publication year	1997
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.2 (1997.) ,p.38- 44
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集II: 奥井復太郎の都市論
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19970000-0038

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

奥井都市論の形成と構成

藤田 弘夫

1. 奥井都市論の位置

日本の都市の社会学研究の源流のひとつは、1920年代のシカゴ大学での研究にあるといわれている。何をもちて都市の社会学的研究とするのかは別にして、シカゴ学派の都市研究は、今日なお社会学者たちの間で折りに触れて言及されている。

シカゴ学派の都市研究の誕生を告げたのが、1915年のR.E.パークの「都市—都市的環境における人間行動の研究のための若干の示唆—」の発表である。1921年には、グリーン・バイブルといわれたR.E.パークとE.W.バージェスの『社会学なる科学への序説』が出版される。こうしたなかで、N.アンダーソンの『ホボ』(1923)、L.ワースの『ゲットー』(1928)、H.W.ゾーボアの『ゴールド・コーストとスラム』(1929)、H.J.ロックとE.H.サザーランドの『ホームレス・メン』(1936)などの研究が発表されている。シカゴ学派の都市研究のひとつの理論的到達点といわれるワースの「生活様式としてのアーバニズム」が発表されたのが1938年である。しかしシカゴ学派の都市研究とほぼ同時代から、都市研究を進めていた奥井の研究に言及する研究者は少ない。

この間、日本では奥井復太郎が黙々と研究を続けていた。奥井が本格的に都市研究を開始したのが、1920年ごろである。奥井はイギリスとドイツの研究を中心に都市研究を進めている。かれがシカゴ学派の都市研究を知るのは1927年以降であり、東京での地域調査が本格化するのが1935年ごろである。そして、1940年に名著『現代大都市論』を完成する。こう考えると、奥井が都市研究を進めていたのは、シカゴ学派が都市研究を進めていたのとほぼ同時代だということになる。

奥井がヨーロッパとアメリカの研究を巧みに咀嚼しながら、日本の現実に即して、都市研究をまとめたことの意味は大きい。ここでは都市の多様な社会現象が、ことごとくひとつの体系のもとに位置づけられている。

ヨーロッパの研究者の都市への関心は、歴史的、哲学的側面に集中していた。このため都市について体系的にまとめた研究はなかった。また、シカゴの研究者たちは、奥井よりも一足先に都市研究を出発させていた。かれらは、都市の社会学的研究の草分けであった。しかしかれらの関心は、ほぼシカゴのことだけに限られていた。シカゴ学派の都市研究は、一時ヨーロッパでも注目を集めた。しかしシカゴの都市研究に関心を抱いたのは、W.ゾンバルトなど一部の学者にとどまった。しかもそれは、ごく一部のことにだけであった。その後、シカゴの学者たちの研究は、個別の調査研究に拡散していった。シカゴ学派で体系的な都市論をまとめた人はいない。

今、『現代大都市論』を読むと、活字も表現も古いことがわかる。本書の最後に付録と

してついている東京を中心とする等時間距離交通図を見ると、いかに現在の東京と違うのかがわかる。その図はむしろ社会史的な興味を掻き立てる。しかしこの書は、恐ろしいほどの現代性をもっている。

奥井の都市研究は「思想」「理論」「調査」の三者が見事なまでに体系化されている。現代大都市論は高い完成度を示す欧米にも類のない画期的な都市研究となっている。しかもかれはこれを、独力でなし遂げたのである。この点で、かれの研究は、ほぼ同時代に進められたシカゴ学派の都市研究をはるかに凌駕している。この時期に、都市研究がここまで到達していたことに驚くばかりである。現在の都市研究の方法は、基本的には出つくしている。では、奥井はどのように都市研究に入っていったのであろうか。

2.社会思想から都市論へ

奥井は晩年、若い時代を振り返って、不思議だと思われるかもしれないが、わたしの助手時代の研究がジョン・ラスキンの社会思想であったと述べている。経験的調査に基づく都市研究を完成させた奥井の研究の出発点が、実は地域調査の研究とはもっとも遠い社会思想の研究にあったのである。

奥井が研究に入ったのは、B.ラッセル、W.ジェームス、J.ラスキンなどの社会思想からであった。しかし大学が奥井に課した研究は、都市経済論と社会改良計画であった。奥井は19世紀初期の都市生活に関する研究に関心を抱いていた。とはいえ、この二つの課題に対して、かれはどのように研究を進めるべきか、まったく暗中模索の感があったという。しかもこのテーマは、当時いわゆる勃興する社会科学の潮流なかでは、いささか魅力のないものだったという。

まず、奥井は都市に対して、産業革命の側面から視点を当てる。かれの都市研究の最初の成果となるのが、「人口集中の現象に対する経済学的説明」と題する論文であった。さらにその翌年、かれは「英国田園都市運動の発生」を発表する。急激な産業化は美しい自然や歴史的な景観を破壊し、醜悪な光景を作り出している。凄惨な生活が資本主義の発展で、都市はいうにおよばず、農村にまで広がっている。こうした産業化の隘路を解決するために起こったのが、田園都市運動である。現実の田園都市の建設はE.ハワードによって担われるが、この運動の思想的背景は、J.ラスキンやW.モリス、さらにフランスのユートピアンであるF.C.フーリエにまで溯る。さらに奥井はロバート・オウエンやウィリアム・リーバーなどの田園での工場建設計画に言及している。その一方で、かれはラスキン関係の一群の論文を続々と発表し、ラスキン研究をまとめていった。奥井の関心は、なお思想的なものにあっただといえるだろう。

奥井は1924(大正13)年、大学から海外留学を命ぜられることになる。その際、かれはドイツを留学先を選んでいく。当時のドイツは社会科学が興隆し、ドイツへの留学は若い学者のあこがれの的になっていたという。ラスキンに魅せられ、イギリスの都市研究を進

めていた奥井があえてドイツを留学先に選んだことは、そうした雰囲気、新たな期待を込めていたのであろう。

奥井が2年半にわたるドイツでの滞在中に関心の的であったのは、アルト・シュタット（歴史的形態をもつ都市）であった。中世都市への関心は当然、都市の歴史への関心となって現れた。かれは都市の経済史や法制史に関するおびただしい文献を読みあさっている。かれは、1925年に2カ月ほどロンドンに滞在し、フランスにも足を伸ばしている。

帰国後、奥井はドイツに関する研究を矢継ぎ早に発表する。奥井は自分の専門ではないとわざわざ断りながらも、ドイツでの前世紀以来の都市の起源論争に踏み込んでいる。ここでは、G.L.マウラー、H.A.ベロー、G.シュモラー、W.ゾンバルトの学説を比較検討しながら、ドイツ法制史論争に巧みに言及している。そのなかで、「ドイツ都市研究序論」は、都市が常に人口稠密な集落であり、これは時間的、空間的束縛を離れて都市の共通の標識であるとする。かれは人口だけが都市と非都市のすべてを区別するものではないとしながらも、都市が常に一時代、一社会における特に人口の稠密した集落であると主張する。この論文はドイツの都市に触れながらも、都市の一般論への志向性を強く持っている。かれはこの論文が序論であってドイツ都市の歴史的発展の詳細なる記述は他の機会に待つとした。しかしながら、本論はついに展開されなかった。その後、奥井はドイツの都市を正面から論じることにはなかった。この点、かれの研究のもう一つの課題であった社会改良においては、ドイツの「社会政策論」研究に一貫して関心をもち続けたのと対照的である。

帰国後の奥井の興味は次第にアメリカの社会学 一わけてもシカゴ学派の都市研究に向かっていた。かれの都市への関心は、イギリスの社会思想から、ドイツの中世都市、シカゴ学派へと移ってきた。奥井はA.スモール、R.E.パーク、R.マッケンジーなどを研究する。とくにかれは、中西部における開拓者夫婦から数十年にわたる都市発達史を描いたスモールの『社会学入門』の第一章「社会成立史」が、気にいっていたようである。奥井はこうした理論研究と平行して、1930年代になると東京を舞台に本格的な都市の実態調査を進める。こうしたなかで、『現代大都市論』を構成するさまざまな調査が実施される。

3.現代大都市論

現代大都市論は、それまでの奥井の都市研究の集大成である。研究をまとめるにあたって各論文は修正されたり、新たな節が加えられたりしている。しかし『現代大都市論』は既発表論文をベースにしているために、叙述に多少の精粗がある。また、もともなった資料も調査が長期におよんでいるため時期的に微妙なズレが生じている。それにもかかわらず、『現代大都市論』の最大の特長は、この書が大都市論であると同時に体系的な都市研究の「原理書」ともなっていることである。では、現代大都市論をひもといてみよう。

われわれには、日常的知識としてわかっていると思っていることでも、いざ学問的に考

えらとなると、かえってわからなくなるものがある。奥井はその典型が、都市だという。さて、都市研究の手がかりは、どこに求めればよいのだろうか。都市の成立には、経済的、社会的過程が深くかかわっている。このことから、かれは都市問題の大部分が経済的、社会的な問題として解けるはずだという。

ここから、奥井の都市哲学ともいべき都市の本質論が開陳される。この部分は奥井の都市論の中核をなすとともに、ドイツの学問的影響をもっとも色濃くもっている部分である。社会生活が行われると、その生活の各方面に関連して、〈中心的機能〉を担う土地が形成され、そこは他の土地とその形態や活動を異にするようになる。これが都市の成立するメカニズムなのだという。都市は全社会の支配力の所在地であり、「支配関係の中核」である。都市とは社会生活の中心地、中核なのである。

この点を踏まえて、都市の社会理論が提示される。都市理論の章は、都市理論・都市社会学と題されている。このことは、奥井が都市理論を、社会学の理論として考えていることを意味している。しかしこの章の最後の節で、わざわざ経済学の理論を検討するなど、かれの都市社会学は経済理論と深くかかわっている。さらに、かれはここで研究対象となるのが、あくまで資本主義社会の中核を形成する都市であるとして、研究の歴史的限定を行う。

都市の理論的検討後、いよいよ都市の具体相に入っていく。現代の大都市の住民は、また市民であるより前に国民経済的、世界経済的な存在である。したがって、市民的な問題といえども、国民経済を無視しては語ることはできない。この点に着目して、かれは都市を「外的」に規定する政治的、経済的側面から研究をはじめ。かれは、まず、全体社会との関連から都市を把握するのである。次の大都市の地域的構成の章では、今度は都市を「内的」地域構成の側面から分析する。奥井が東京の各地で実施してきた地域調査が、ここで明らかにされる。大都市の地域性、地域生活と人口構成、三田学生街の調査、都心地区の形成とビルディング街の発展などが、次々と取り上げられる。

次の都市社会の特質を扱った章は、もっとも社会学的なところである。ここでは、典型的な都市人の気質やパーソナリティとともに、都会人がもつ反社会的性格がとりあげられる。都市は生活共同体である。しかし奥井のいう生活共同体とは、法制的、行政的に組織されるものではなく、むしろその基底をなす社会関係によって生み出されるものである。異質な個人の集まりである都市では、反発、乖離、衝突、抗争などの現象が日常的に発生している。それにもかかわらず、人々は共同の生活を営んでいる。奥井はそこに「市民意識」が生み出される余地があるという。

奥井都市論の大きな特色となっているのが、「都市計画」の存在である。都市計画が社会関係を無視してはあり得ない。このことは、都市計画がたんに物的な計画に留まるものではなく、土地、人間、社会の三者関係から導き出されることを意味している。では、都市計画の意義は何にあるのか。かれはそれは市民に、美・利・健の三つを提供することで

あるという。都市計画には、全体的都市計画と部分的都市計画との二種類がある。全体的都市計画は文字どおり都市全体にかかわる計画であり、地方計画や国土計画につながるものである。これに対して、部分的都市計画は都市の一部を対象とするものである。全体的都市計画は産業活動など都市の「動」の部分とかかわるのに対して、部分的都市計画は住民生活など都市の「静」の部分とかかわる。たとえば、住宅地などでは、無用な者が侵入するのを防ぐ意味でも幹線道路を作るべきではない。町はひとつの社会的雰囲気を生み出すためにも、ある程度は閉鎖的な方がいい。都市計画とは、都市生活を正しく規律、指導するものなのである。かれの都市計画は、都市社会学研究の結論でもあった。

かれは最後に、現代文明の典型としての大都市を論じる。都市や都市生活に対する批判は、いつの時代にも存在した。農業こそが国の根本だという考え方は、ギリシアの昔からある。しかしかれは世界を支配する国となったのは、農業国ではなく農業を離れた国であったとして、現代文明において、都市の存在を不可欠なものとした。

奥井はこのように都市を、都市の哲学・思想、都市の社会理論、都市の地域構造、都市の社会構造、都市人の心理や文化、都市計画、都市文明の意義と重層的に分析する。『現代大都市論』はイギリスの学問から社会思想を、ドイツの学問から都市の哲学と歴史を、アメリカの学問から社会調査を導入しながら、これらを巧みに構成するなかで生み出されたものである。とくにシカゴ学派の都市研究からは、その理論的核をなす人間生態学(Human Ecology)が抜き取られ、代わって経済の理論がそこに差し込まれている。

かれにとって『現代大都市論』は、それまでの研究のまとめである以上に、あらたな研究の出発点となっている。こうした観点から、かれは戦中・戦後に国土計画、過剰人口、国民組織、集合住宅、地域振興、コミュニティなどの問題に積極的に議論を展開する。とくに戦後は近代化の問題とともに、浜松、名古屋、北九州などの総合計画の立案に参画するなど、現実の都市行政に深くかかわっていった。

4.戦後の奥井都市論と都市社会学の発展

奥井の議論は、その後の都市研究において、さまざまなかたちをとりながら展開する。ここでは、後に社会学者によって議論されることになる幾多の問題のうち、二つに絞って取り上げることとする。

まず、第一は、都市の本質にかかわる問題である。『現代大都市論』において、奥井は都市を、全体社会の「支配力の所在地」とか「支配関係の中核」、また「社会生活の中心地」や「中心的機能を担う土地」といった言葉でいい表わしている。後に、かれは、当時、都市を「中心機能の地域的結集」という概念のもとにとらえることを考え出し、この点から都市研究を進めていたと語っている。

奥井は都市を、戦後間もなく「空間的交通網における結節的機能」をもつところだとする見解を発表する。この概念が、鈴木栄太郎に引き継がれ「社会的交流の結節機関」とし

ての都市概念となる。鈴木は奥井の空間的交通網における結節的機能としての都市概念を、社会的交流の結節機関としてを継承する。

しかしこの概念では、奥井が『現代大都市論』において強調していた都市のもつ「支配力の所在地」とか「支配関係の中枢」とかといった性格が希薄にならざるを得なかった。鈴木のような思いが、矢崎武夫が都市の「統合機関」説を発表した際に、この概念への評価にもつながってくるのである。矢崎の統合機関は都市を、何よりも権力や支配の関係からとらえようとするものである。鈴木は矢崎の統合機関概念に接して、自分の結節機関を集散機関と言い換えた方がいいのかもしれないなどと、この概念の再検討を考えていたことが、かれの死後に発表された『国民社会学原理ノート』から伺える。

次に、奥井の地域住民組織に関する問題として、「町内会」の問題をとりあげてみよう。かれは1938年に「町内会組織の現代的意義」を発表するなど、町内会組織に深い関心を抱いていた。かれは町内会の近隣親和の機能を評価する一方、その組織化には大きな危惧を抱いていた。町内会は戦時中に戦争の協力機構として大きな役割をはたす。このため町内会の組織は、占領軍によって禁止された。

ところが、日本の独立後、占領軍による町内会の禁止令が失効すると、戦争中の思い出から忌避されていると思われてきた町内会が復活してくる。1953（昭和28）年の全国都市問題会議は、「市民組織の問題」を議題にあげている。ここで奥井は町内会の問題を論じている。かれは、町内集団が都市生活で生み出されるさまざまな不安、不便、不利を、安全、厚寧、保護にかえるように作り出した互助組織だという。つまり町内集団が住民にとって、よくも悪くも近隣互助による生活確保の「社会型」となっているのだというのである。

この概念が、近江哲男に継承されることになる。近江は町内会が、わが国の国民の持つ基本的な型のひとつであり、人々が集団を結成し維持していく際の原理をこの原型に求めるとして、町内会は日本人の文化の型だという。つまり近江は奥井が町内会を社会型とした議論を拡大し、町内会「文化型論」を展開する。この文化型論は、その後多くの学者が活発に議論することになる。

奥井復太郎が提起した問題は、総合的な都市研究方法の確立から欧米流の部分的都市計画にいたるまで、実に多方面におよんでいる。しかしここでは、それらのなかから「都市の概念」と「町内会」に関する議論を紹介してきた。都市の概念の問題は、都市社会学のみならず、都市を研究しようとするとき常に浮かび上がってくる問題であり続けるであろう。また、町内会をはじめとする地域集団は、行政学の問題であるのみならず、今なお都市社会学研究のひとつの焦点となっている。

奥井は戦前に『大都市論』を完成させた後も、敗戦前後の極度に悪化した出版事情にもかかわらず、ガリ版刷をしてまで次々と研究を発表している。しかもそれは、常に新しい論点を含むものであった。奥井の都市研究は、シカゴ学派の都市研究が花開いていた192

0年代から、1965(昭和40)年の死に至るまで続けられていた。とくに『現代大都市論』後、敗戦を挟んで実に多産な研究成果をあげた。奥井の都市研究は、あまりにも大きなものであった。

先行研究は後発の研究者の道案内になるものである。しかしあまりにも立派な成果は、後発の研究者の足かせになりかねない。大きな研究成果ほど、後発の研究者にとって、その咀嚼は大きな負担になる。若い日本の都市社会学者は奥井の研究を検討するより、直接シカゴ学派の都市研究の検討に向かった。かれらにとっては、シカゴの研究の方が「文化」も「時代」も異なるとはいえ、奥井の東京研究よりもかえって身近に思えたのである。奥井の都市研究は、若い都市社会学者にとって、必要以上に縁遠いものであった。それが何に起因するのかは、知識社会学上の問題であろう。

参照文献

- 奥井復太郎『奥井復太郎著作集』1～8巻 別巻 大空社 1996年
近江哲男「都市の地域集団」『都市と地域社会』早稲田大学出版会 1984年
鈴木栄太郎『国民社会学原理ノート』未来社 1975年
藤田弘夫「日本都市の分析視角」『都市と国家』ミネルヴァ書房 1990年
藤田弘夫『日本都市の社会的特質』時潮社 1982年
矢崎武夫『日本都市の発展過程』弘文堂 1962年

(ふじた ひろお 慶應義塾大学医学部)